

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年5月24日発行「補習校だより」第6号より抜粋

「わたしは／ぼくは」をいちいち書かない。

「わたしは・ぼくは」で書き出すと、「わたしは、きょうはお母さんとケーキを作りました。」とか、「ぼくは、補習校は日本語の本を借りられるから、楽しいです。」というかたちになってしまいます。文法的にいうと、一つの文に叙述の主体が二つある複雑な構造ですから、すでにして簡潔(すっきり)という条件に外れます。

読み手にしてみると、「わたしは」とあるので「わたしがどうしたのだろう」と思って先へ進むのですが、「きょうは」と続いているため、「わたしがどうしたのか」を気にかけてつ「きょう何があったのだろう」と先を急ぐこととなります。読み手をこういう宙ぶらりんな状況に置くことは、「^{たつ}達意」にも反します。

お母さんとケーキを作ったのは誰なのか、補習校で本を借りられて楽しいのは誰なのかは、書き手の名前が書いてあるのですから明らかです。つまり、の「なくてもよい言葉や部分は削る」ということでもあります。

英語の「^{アイ}I」と同じに考えて「わたしは・ぼくは」をいちいち書くと、このような問題が生じます。日本国内でしたら中三でも理解できるかどうかと思われることであり、補習校の子ども達のほうが高度な国語学習をしていることとなります。

必要のない「そして」を書かない。

「六時に起きました。そして、顔を洗いました。そして、朝ごはんを食べました。」のように使われる「そして」は、単に時間の進行を示しているにすぎません。文章は、時間の進行に沿って叙述していくのですから、こういう「そして」は不要です。「六時に起き、顔を洗い、ごはんを食べました。」とすればよいのです。

「起き、・・・」「食べ、・・・」のように動詞の連用形+テン(連用形中止法)は、「そして」と同じ役割を果たします。ですから、「起きて、そして、・・・」のように「連用形+て+テン+そして」のかたちは、「起きて」と「そして」で意味が重なるうえに、「^{おん}起きテ」「^{おん}そしテ」と「て」の音が連続するので、もたついた感じがします。

これは、の例証でもあります。

子ども達が無気なく書く「そして」の大半は、要らない「そして」です。お子さんの下書きを一緒に読み返しながらそれらを消していくと、次に文章を書くとき、「そして」を書こうか書かないか考えるようになります。すなわち、文章に対する美意識の芽生えです。

次の文中の「そして」が必要なものであることは、これを取ってしまったら、意味も音調も不全な感じを受けることで納得できるでしょう。

「きびしい練習が続いた。そして、とうとう試合の日がやってきた。」